早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　11号―2　2004年3月

アイヌ語の復興と普及におけるメディア利用の取り組みについて

―アイヌタイムズとFM二風谷放送の事例を中心に―

上　野　昌　之

序

言語学では「危機言語」または「消滅の危機に瀕した言語」という概念がある。ある言語の使用者が減少し，近い将来その言語を母語とする使い手がいなくなる可能性が高い言語のことである。アイヌ語は長期にわたり母語話者が減少し続けている。しかも，子どもがこれを母語として修得することがなくなってから久しく，母語話者は高齢化が進んでいる。マイケル E クラウスによれば，言語の危機の度合いは，「絶滅の運命にある言語」「絶滅の危機にさらされている言語」「安泰な言語」に分けられると言うが(1)，アイヌ語は非常に危険な状況にあるといえる。数代前にはアイヌ語しか使用できなかった人々も存在したが，現在のアイヌ語話者は日本語を併用することができるため，日常生活で支障をきたしているわけではない。一般のアイヌ民族の人々も日本語が母語となっており，アイヌ語が「危機言語」であるといわれても，危機感をもたない理由の一端がそこにある。

危機的な状況にあるアイヌ語について，田村すず子(2)，中川裕(3)，奥田統己(4)などアイヌ語研究者からは適切な対応の必要性が訴えられてきた。アイヌ民族の中ではこれまでにアイヌ語復興のためにウタリ協会の支部でアイヌ語教室が実施されたり，アイヌ語弁論大会が催されたり，ラジオ放送でアイヌ語講座がおこなわれたりしている。これらは言語の保有する知識の蓄積や世界観など過去の経験の化石化を食い止め，民族の文化体系の維持を図ろうとする努力に他ならない。今日，先住民族が政治的な運動をするなかで，民族的アイデンティティが民族認定の不可欠な要素となっている(5)。言語が民族文化の独自性をも示す指標と捉えられている点を考えると，その当否は置くとしても，独自言語の保持は政治的な正当性を証明するものとなる。

そこで本稿では，アイヌ語の復興・普及のためにおこなわれている活動の中で二風谷での二つの活動に着目した。二風谷はアイヌ民族が多く住む地で，アイヌ語教室が最初に開設されたところでもある。ここで1997年から発行されているアイヌ語の新聞「アイヌタイムズ」と2001年から始まったアイヌ語の放送「FM二風谷放送」に視点を置き，両者がアイヌ語の復興・普及にとっていかなる機能を持ち，役割を果しているのかを明らかにしていく。アイヌ民族自身が，こうした情報メディアを利用して，アイヌ語の復興・普及を図ることは，はじめての試みであるといえ，アイヌ民族にとってこうしたメディアのもつ可能性を考察していく。

まず，アイヌタイムズについて現代的な社会の事象に対応する語彙や表現のあり方を考察しながら，

その機能と役割を考える。次にFM二風谷放送について，アイヌ語学習者の視点とアイヌ民族コミュニティーという視点からその機能と役割を論じていくことにする。そしてそれを踏まえ，メディアの持つ可能性を示すことにする。

1－1　アイヌタイムズの概要

1996年，二風谷でアイヌ語による新聞を作ることを目的にアイヌ語ペンクラブが結成された。翌年3月にアイヌ語表記による新聞が発行された。A4版12頁で，年4回発行の季刊紙である。これまでアイヌ民族は様々な雑誌や機関紙を発行してきたが，日本語によるものがほとんどで，時事問題や不特定のテーマを扱うものとしてアイヌ語による定期刊行物は初めてのことである(6)。現在（2003年9月）までに26号が発行され，全国の定期購読者は300人を超える。アイヌ語はカナ表記とローマ字表記が併用され，発行の2年目から日本語訳が次号に添付されることになった。当初記事はペンクラブ会員による執筆であったが，同人誌的な色彩が強まることを懸念し，読者からの投稿も受け付けることになった。

各号5，6本の記事が掲載される。内容は，アイヌ語やアイヌ文化や自然にまつわること，アイヌ民族の活動や歴史上の人物評などの記事が多い。エッセイや創作民話なども掲載される。新聞と銘打っているので，その時々の時事問題や政治・経済問題，アイヌ民族に関わる社会問題，国際的イベント，インターネット関連などの記事も掲載される。だが，その割合は多くはない。季刊紙のため即時性のあるものではなく，意見コラムのようなものとなっている。一記事あたりの分量は1～3頁であるが，2表記併記のため実質的にはこの半分である。

1－2　現代事象に対するアイヌ語表現とその対応

アイヌタイムズがアイヌ語の復興と普及にとっていかなる役割を持つか，紙面を作る上で文章を表現するときの問題点を考えていくなかで考察していくことにする。現在アイヌ語は日常的に使われていることばではないため，母語話者でないものが表現するのは楽なものではない。長年アイヌ語を学習してきているペンクラブの会員でも，自然な文体で文法的にも完全な文章を作ることは，困難な作業であると思われる。記事の内容や表現は，毎回もたれる編集会議の場で討議され，文法，用例，用法，語彙の選択などが確認され修正が加えられる。編集者の浜田隆史は，日本語からの類推でアイヌ語をあてはめようとするために，アイヌ語としてよい言いまわしであるのか確認することが編集の課題になっていると述べている(7)。アイヌ語母語話者ではない書き手は，日本語によって概念形成されており，無意識に日本語の干渉を受けることになる。自然なアイヌ語表現を復興させようとするとき，日本語など他言語の干渉をいかに少なくしていくかが課題となる。しかし，母語話者が少なくなっている現在，アイヌ語の的確な表現を得るためには膨大なアイヌ語テキストを参照する以外に方法がなくなりつつある。

こうした概念の差異による発想や表現の違い，またその文章が適した表現であるのかどうかの不確

実性は，アイヌ語を復興するときに陥るパラドックスのひつといえよう。アイヌタイムズの方針では，「文法的に完全な間違いであると証明できなければ，多少の冒険的表現も許容している」という[8]。アイヌ語が現在置かれている状況を考えれば，それが的確な表現であるかどうか，他に意見を求めるための提示として有効な方法と考えられる。

つぎに，これまでのアイヌ語にない語彙についての問題を考えてみることにする。現代社会で使用される，政治，経済，社会，医療，科学技術など様々な分野で使われていることばの多くが伝統的なアイヌ語にはないものである。これらをどのように表現するかは，いくつかの考え方ができる。アイヌ語タイムズではこの点について5項目のガイドラインを作り，対応している[9]。①文法的にただしいこと。②アイヌ語修得者が何となく察知できること。③アイヌ文化の精神を逸脱しないこと。④今は言語の統一を図らないこと。⑤どうしても無理があるようなら外来語も認めること。アイヌタイムズに政治，経済，社会，医療，科学技術などの記事が少ないのは，投稿者の志向によるところが大きいのだろうが，こうした分野の話題を表現することが難しく，造語の必要性や外来語の借用が多くなり過ぎるということが理由とも考えられる。

ここで具体例を挙げながら，アイヌ語にない語彙について考えていくことにする。第21号の冒頭記事「エアドゥ，コンサドーレ札幌」は読者を交えた編集会議を経て作られた記事である[10]。これをもとにアイヌ語の記述表現について考えていくことにする。記事の内容は，業績が悪化しているエアドゥー（北海道国際航空）と累積債務に悩むプロサッカーチーム，コンサドーレ札幌の経営問題への意見コラムである。以下に日本語版の訳から，日本語とアイヌ語との表現差を提示してみる。なお，アイヌ語の直訳を括弧内に記した。また，アイヌタイムズでは借用語はイタリックで示している。

1）日本語版：「エアドゥへの追加支援が問題になっている」
　アイヌ語：“***Eadû*** eun na icen a=kore yakka pirka ya ka a=utari opitta a=eyaykosiramsuypa ruwe ne”
　（エアドゥにお金をもっと渡してもいいかどうか私たちみんなが考えています）

2）日本語版：「エアドゥの業績は悪化しています」
　アイヌ語：“***Eadû*** poro icen uyna eaykap ruwe ne”
　（エアドゥは大金が取れなくなっています）

3）日本語版：「そのクラブは30億円ほどの大きな累積赤字を抱えています」
　アイヌ語：“ne ***kurabu*** 30 ***okuen*** pakno poro soatay kor”
　（そのクラブは30億円ほどの大きな借金をもっています）

4）日本語版：「身の丈にあった経営をする」
　アイヌ語：“yayesanniyo yak pirka”
　（自分のことを精一杯やるといい）

記事は経済問題を扱っているため専門用語が多く用いられる。だが，アイヌ語に通常新聞等で用いられるような経済用語にあたるものはない。このため言い換えを行なうか，外来語の借用や造語をする必要が出てくる。ここでは先の原則に従い外来語の借用は控え，ことばの言い換えで表現することを試みている。例1，2の「追加支援」「業績の悪化」などの語彙に見られるように，“icen”「お金」という語を用いて，そのやりとりを説明的な表現により言い換えている。専門分野の語彙の少ないアイヌ語で表現するための基本的な手法と考えられる。しかし，表現に的確性があるとはいえず，文章が冗長になる嫌いがある。これに対し，例3の「累積赤字」にみられるように，既存のアイヌ語の語彙“soatay”「借金」を拡大解釈する手法も用いられている。この手法では読者は文脈からほぼ正確に意味を理解することができる。しかし，意味の拡大が可能な語彙が必ずしもあるとは言えず，あったとしても読み手や使い手に共通認識が形成されないと混乱を招くことが予想される。そして，例4のように異なる文脈からの意訳法がある。異言語間で意味の疎通を図るためには不可欠な手法ではあるが，厳密性が要求される内容において用いることは難しいだろう。こうした方法が取れない場合，借用語が用いられている。たとえば例3では“***okuen***”「億円」という語彙が使われている。これは日本語の金融上の単位であるばかりではなく，アイヌ語に「億」という概念を示す語彙がないため，借用せざるを得ない語彙である。しかし，次の記事のように借用語が多いと，日本語話者には理解しやすいが，アイヌ語の独自性が損なわれていくことになる。

> “ne ***katakana mozi*** anak ***yunikôdo*** 3.3 sekor a=ye ***kokusai-kikaku*** or a=omare wa, asir ***yunikôdo*** a=kar.”
>
> 「このかたかな文字が新たにユニコード3.3といわれる国際規格の中に入れられ，新しいユニコードができました。」(11)

経済記事のような場合は，専門領域の概念を示す新たな語彙を作ることによって置き換えは可能となる。語の意味や定義は日本語を通し周知されているものであり，たとえ伝統的なアイヌ語にない概念であっても一般的に受け入れることは可能であろう。他の分野においても専門用語であれば，新語に置き換えることで表現の正確さは増大する。しかし，新たなことばを作る場合，既存のアイヌ語をもとにその意味の拡大を念頭に造語をすると，伝統的な意味や概念との衝突や解釈の捏造が起こりかねない。アイヌ語研究者などを交え慎重に検討を重ねる必要があるのは言うまでもない。

いずれにせよ造語や借用語は，新しい語彙が多量にアイヌ語に加わることである。それはこれまでのアイヌ語の表現方法に影響を及ぼし，伝統的な言い回しや考え方に変更を迫るものになる可能性があるといえる。日常用語としてアイヌ語を復興・普及しようとするとき，伝統的なアイヌ語では表現できない部分をいかに補っていくかという作業が行なわれる。このなかには伝統的なアイヌ語の変容を求めざるを得ないというプロセスが包含されているのである。

こうした文章表現に一定の枠組みを作っていくのが編集作業である。そこでは知識や判断力，そし

て多大な労力が求められる。アイヌタイムズでは通常はペンクラブの会員が編集作業を行なっているが，年に一度読者も交えて拡大編集会議が開かれている。このような試みは広く意見を求めると同時に，アイヌ語が日常的に使用可能な言語としていくときに，目的意識の確認や知識の共有化をはかる重要なプロセスということができる[12]。今後，アイヌ語の復興の取り組みの中で，専門用語の統一化や正書体，方言差，アクセント表記などの採択に関して様々な議論が必要となってくる。こうした必要性を意識化させ，方向性を示すことも，この作業の持つ役割ではないだろうか。

以上のように考察してくると，日常性の失われたアイヌ語の復興には，言語使用者側の問題とアイヌ語に内包される問題とがあることがわかる。アイヌ語を表現する際に日本語の干渉を排除し，アイヌ語の造語，用例の整理などを通してどう表現力を回復させるかが課題となっている。アイヌタイムズは，こうした課題に対して試案を提示する役割を担っているのではないだろうか。アイヌ語で現代的事象を表現することは，現在この紙面以外の場では行なわれていない。ここでの試行が今後のアイヌ語の表現方法をめぐる指標となってくるだろう。それゆえ，購読者を増やし多くの人々の目に触れ，拡大編集会議などの場で議論の枠組みを広げていく必要があるのである。メディアという開かれ，不特定が関わることができる場であるからこそ，この機能が発揮できるのである。

次ぎに，アイヌ語を音声として伝えるFM二風谷放送の試みについて考察することにする。

2－1　FM二風谷放送の概要

FM二風谷放送（愛称，FMピパウシ）は微弱な電波を用いた，無線免許を必要としないミニFM放送である[13]。2001年4月から月に一度，第2日曜の午前中に1時間の枠で放送が行なわれている。放送をはじめた萱野茂はアイヌ語の普及をめざし，「アイヌ語を電波に乗せ，二風谷住民をも含めたたくさんの人たちにアイヌ語を直に聞いてもらい少しでも身近なものにしたい」[14]と，放送を開始した。編集局長兼番組進行は萱野志朗がおこない，放送スタッフには札幌のコミュニティーFMの関係者や地元の有志などがボランティアで参加している。放送出力が小さいため聴取できるエリアは，局から数百メートルと限定されている。聴取エリアの狭さを補うために放送日の翌日にはインターネットホームページにアップロードされる。今年度から札幌東区のコミュニティーFM「さっぽろ村ラジオ」と電話回線により結ばれ，同時放送が行なわれるようになった。

開局から2年を迎え，この8月までに28回の放送が実施された。多少の入れ替わりや特別番組はあったが，基本的な内容構成は当初から変っていない。番組はアイヌ語プログラムと情報プログラムに大別できる。アイヌ語プログラムは，「アイヌ語一口会話」，「カムイユカラ」，「季節のお話」などである。この他にオープニングとエンディングではアイヌ語の歌がテーマ曲のように流れる。情報プログラムとして，二風谷地域に関わる情報とアイヌ民族に関わるものを伝えている。前者は町が発行する週報『びらとり』の抜粋であり，後者は「地域ニュース」のとしてアイヌ民族や平取町に関わる最近のニュース扱っている。また，二風谷小学校校長による「二風谷小学校だより」が，最近の地域教育の姿も伝えている。この他に二風谷内外の人を招いて話を聞くインタビューコーナが設定されてい

る。ゲストは主にアイヌ民族であるが，アイヌとかかわりのある和人であることもある。

以上のように，1時間の放送では生活の中ではほとんど聞く機会のない生きたアイヌ語に触れながら，アイヌ文化の素養を高めることができる作りとなっている。アイヌ民族の共時的な情報や平取・二風谷地域の話題をピックアップして地域の人々に伝えるというアイヌ・コミュニティーや地域コミュニティーへの情報の提供ということも，そのプログラムに盛り込まれている。インターネットによるメール受信により双方向性も確保され，番組に反映されることが可能である。

では，こうした放送メディアを通してのアイヌ語の普及という点で，アイヌ語プログラムが教育的な役割をどのような形で果たしているか次に考えてみる。

2－2　放送教育としてのアイヌ語プログラム

戦後，ラジオ放送が再開されるとともに放送教育は始まった。ラジオによる放送教育は社会教育の一端として重要な位置を占めて，現在に至ってもなお重要な学習機会としてある。FM二風谷放送はアイヌ語を広く聞いてもらいたいとして始まった。アイヌ語学習という目的は明示されてはいないが，代表者の萱野茂が二風谷アイヌ語教室の開設者であることからも，アイヌ語の普及を目指したものであることは看取できる。現在アイヌ語話者はきわめて少なく，第二言語として学習している人々もけっして多くない。平取町二風谷地域でもこの傾向は否定できない[15]。しかし，アイヌ民族が多く住む地域なので，アイヌ語への潜在的な学習要求は高いともいえる。

放送ではいくつものアイヌ語プログラムが用意されている〈資料1〉。初回から続いているものに「カムイユカㇲ」（神謡）がある。一つの話には長短があるため複数のものを流すこともあるが，基本的には1話で，簡単な内容解説がつけられる。アイヌ語をそのまま聞かせるという趣旨からするとウポポ（歌）やヤイサマ（即興歌）も，アイヌ語プログラムのバリエーションとすることができる。継続的なものに「アイヌ語一口会話」がある。アイヌ語の挨拶や簡単な会話，植物名称やなぞなぞなどの内容となっている。「カムイユカㇲ」が高度なアイヌ語であるに対し，こちらは初歩的なものである。その他に「季節のお話」でアイヌ文化が触れられ，アイヌ語の語彙や表現が伝えられる。

放送では毎回様々な内容でアイヌ語番組が進められている。しかし，放送のなかでは，学習を意識した内容や表現は用いられていない。番組構成や技法も語学学習を促す特別なものはない。たとえば，カムイユカㇲは音声資料をそのまま流しており，途中で止めたり，繰り返し聞かせたりということはない。解説もストーリのあらすじのような概説にとどまり，発音や文法的な説明，表現上のポイントが示されるわけではない。同様なことは「アイヌ語一口会話」でもいえる。挨拶など簡単な言葉については，意味などを説明することはあるが，会話練習に常用されるスキットを挿入したり，学習者へ発話を促すポーズが用いれられたりすることもなく，語学学習という印象は薄い。こうした方法は，語学の教授技法から考えるとけっして好ましいものとはいえない。とくに初歩の学習者を考慮した学習という点からは，不十分さは否定できないものである。アイヌ語を第二言語として新たに獲得しようとするものにとって，テキスト教材や文法的な解説，反復練習は効率的に学習するうえで欠くこと

ができないものである。たとえ10分ほどの時間であっても目的をしぼったプログラムを作ることは可能であると思える。では，FM二風谷放送のアイヌ語プログラムには，教育的な効果は望めないものなのであろうか。

これまで放送教育は，与えられた内容を継続的に学習していくことが求められていた。語学教育にはとくにその傾向があり，学習段階を考慮して番組が作られている。しかし，放送教育の重要な要件は直接的な学習ばかりでなく，能動的な学習の場の提供ということもあげられる[16]。学びのテーマを提示し，学び方，学びの場作りの方法や発信者・表現者となる方法の提案が，教育放送の隠された機能といわれる。アイヌ語放送自体が語学練習の要素を包含していなくとも，聴取することによって学習の動機付けができ，学びの方向性を見出せるのであれば，教材学習をしたり，アイヌ語教室に通ったりと発展的な学習は可能となる。すでにアイヌ語の素養のある人々にとっては，日常的な場での表現者となることも期待できるのである。これまでアイヌ語を使用することに抵抗があり，発話することができなかった言葉を使い始めたり，新たに学ぼうとする意識の変容を促したりするものであれば，放送には教育的な効果があるといえるのではないだろうか。能動性を喚起することも放送教育の重要な役割といえるのである。実際に放送に出演しインタビューを受けた古老のひとりは，その後アイヌ語教室に通うようになっているといった例もある。学習の動機付けから能動的な学習の場への参加という，学習機会の提供という機能は果たしているといえる。

放送教育には，再教育や生きがい教育といった生涯教育としての役割があるといわれる[17]。アイヌの高齢者にとってはアイヌ語の放送は，失われつつある過去を取り戻し，自己を再認識する場ということができるだろう。そしてこれからアイヌ語を獲得しようとする人々にとっては，新たな知識を獲得するリカレントの意味合いももつことになる。また，放送教育では情報の双方向性や対話性を付加し扱えることが必要とも考えられている[18]。この点は電子メールがさらに活用されたり，アイヌ語教室に参加したりすることで，有効性は高まっていく。

FM二風谷放送は教育目的や学習目的を明示した放送ではない。FM二風谷放送のアイヌ語放送は，あくまでもアイヌ語を広く聞いてもらうことを主眼に置いている。これは，アイヌ語を文法や構文といった技術的なものにとどめず，ことばの背後にある民族的な深層との連鎖を意識し，話しことばの内包する有機性を示唆しているからにほかならない。

FM二風谷放送の番組編成を踏まえると，アイヌ語放送の目的が明らかになってくる。そこで次に番組構成を考察することにする。

2－3　コミュニティー・メディアとしての機能と役割

これまでの2年間，本年の8月までに28回の放送がなされた。基本的な番組構成は，先に示したように，特別番組を除いては変りがない。ここではその番組内容から見たFM二風谷放送の性格について考察する。

これまでの放送内容を項目ごとに分類することで，放送の意図，目的を明確にしていきたい。まず

これまでの放送内容を分類し，数量化したものが〈資料1〉にあたる。次に、これをアイヌ語・アイヌ文化に関する番組とアイヌ民族情報・コミュニティー情報に関する番組，そしてその他の番組とに分類し，その比率を示したものが〈資料2〉である。そして，これと並行して任意の回（第24回を選択）について内容項目ごとに放送時間を示したものが〈資料3〉である[19]。これらを比較し検討してみると，次のような番組編成上の特徴がみて取れた。

アイヌ語・アイヌ文化と民族情報・コミュニティー情報との内容項目数の割合は，およそ4：6となっている。そして，この傾向は一回当たりの項目別放送時間でも同様にみられた。FM二風谷放送はアイヌ語の聴取を目的に開局され，アイヌ語とアイヌ文化の普及を行なってきたといえる。ところが，実際の放送番組の内容を調べてみると，アイヌ・コミュニティーに関する情報量が，項目別でも時間別でもアイヌ語・アイヌ文化よりも多いという結果となっていた。こうした傾向を示すことになった理由について番組の編集構成をおこなう萱野志朗は，非アイヌ語話者の限界と公共放送の使命を語っている[20]。出演者がアイヌ語で放送できれば，アイヌ語の放送時間は増大するが，それは人材的に難しい。そして，ミニFMであっても公共放送であり，聴取者の立場を考えてアイヌ語一辺倒の放送を避け，聴取者が聞きやすい放送に心掛け，情報プログラムを適度に入れるなど，放送内容を吟味していかなければならないことなどを理由としている。

しかし，こればかりではないであろう。それは二風谷アイヌ語教室が発行している『二風谷アイヌ

FM二風谷放送番組分類〈資料１〉

項目No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
回数	年月日	カムイユカラ	カムイユカラ解説	アイヌ語会話	他アイヌ語	季節のお話	アイヌ情報	地域情報	地域教育	インタビュー	外部の声	座談会	オープニング挨拶	エンディング
1	2001.4	2		1	1			3			1		3	1
2	2001.5	2		1	1	1		2		1	1		1	1
3	2001.6	2		1	1	1	2	1		1			1	1
4	2001.7	2		1	1	1	2	2		1	1		1	1
5	2001.8	2		1	1	1	3	1		1	1	1	1	1
6	2001.9	2		1		1	1	2		1	1	1	1	1
7	2001.10	1	1	1		1		3		2		1	1	1
8	2001.11	1	1	1		1	3	1		2			1	1
9	2001.12	1	1	1		1	1	2		2		1	1	1
10	2002.1	1		1		1	1	2		2	1		1	1
11	2002.2	1	1	1	1	1	1	2		2			1	1
12	2002.3	1	1	1		1	2	2		2			1	1
13	2002.4	2		1		1	3			2		1	1	1
14	2002.5	1	1	1		1	2	2		2			1	1
15	2002.6	1	1			1	3	1		2			1	1
16	2002.7	1	1	1		1	2	2		2			1	1
17	2002.8					1	2	1		3			1	1
18	2002.9	1	1	1		1	2	3		1			1	1
19	2002.10	1		1		1	3	1	1	1		1	1	1
20	2002.11	1	1	1		1		2	1	1			1	1
21	2003.1	1	1	1		1	3	2	1				1	1
22	2003.2	1		1		1	1	3	1	2			1	1
23	2003.3			1	1	1	4	1	1	1			1	1
24	2003.4	1	1	1		1	4	1	1	1			1	1
25	2003.5	1	1			1	3	2	1	1			1	1
26	2003.6	1	1	1		1	2	3	1	1			1	1
27	2003.7	1	1	1		1	4	2	1	1			1	1
28	2003.8	1	1	1		1	2	2	1	1			1	1
計		33	16	25	7	27	56	51	10	39	6	6	30	28

放送内容項目別分類〈資料２〉

言葉／文化	アイヌ語	アイヌ文化		計	種別比率	言語：情報比
No.1 ～ 5	81	27		108	33%	40.20%
コミュニ情報	アイヌ情報	地域情報	声			
No.6 ～ 10	56	100	6	160	48%	59.70%
その他	その他					
No.11 ～ 13	64			64	19%	***

放送内容時間別分類（第24回）〈資料３〉　（単位 分秒）

2003.4.13	アイヌ語・アイヌ文化					時間合計	種別比率	言語：情報比率
番組項目	カムイユカラ	カムイユカラ解説	アイヌ語会話	他アイヌ語	季節のお話			
時間枠	6'30	2'18	4'07	0'	5'49	17'44	34%	40%
	アイヌ・地域情報							
番組項目	アイヌ情報	地域情報	地域教育	インタビュー	外部の声			
時間枠	8'40	2'20	9'50	5'49	0'	26'39	50%	60%
	その他							
番組項目	座談会	オープニング	エンディング					
時間枠	0'	3'40	4'29			8'09	16%	***

語教室広報紙』と比較すると明確である。広報紙は不定期刊行であるが，1988年5月の創刊からこれまでに70余号が発行されている。その紙面構成が本放送の内容ときわめて類似しているのが看取できる。広報紙ではカムイユカラなどの語りは扱っていないが，インタビューや地域情報，アイヌ民族情報などで成り立っており，放送の内容構成との類似性はきわめて高い。広報紙はアイヌ語教室の冊子というよりも，コミュニティー・メディアといえるものである。地域情報やアイヌ関連情報を記事にすることで，二風谷に住むアイヌ民族や他の人々の結びつきを強める役割を果している。

FM二風谷放送の放送内容の構成は，コミュニティー情報やアイヌ情報の比率が高い。これは地域の人々にこうした情報を伝えるとともに，それを共有していくことで地域の結びつきを高めていこうとする目的があるといえるのではないだろうか。本年6月夏至の日に，オプシヌプリ（穴あき山）で日の入りを眺める会を催すことを放送で伝えたところ，当日は数十人の人々が集まったという。ここからみても放送が情報源として機能していることがわかる。こうした催しに積極的に関ったり，中継をしたりすることで，放送に対する親近感は高まっていくのではないだろうか。

現在FM二風谷放送は他のコミュニティーFMとの提携やインターネットにより聴取できるようになっている。こうしたことは二風谷という限定された狭い地域での地域メディアからアイヌ民族のメディアへと質的な変化が求められることでもある。遠方のインターネット聴取者から電子メールが送

られてくるが，ラジオ放送による放送地域の拡大は，アイヌ民族以外の不特定の人々へも聴取対象を広げることを意味する。現在は二風谷向けの放送がそのまま流されている。しかし，これまでの情報内容や放送手法が，より広いエリアで聴取者に受け入れられるかどうかは予想できない。二風谷というローカルな地域のことを情報として知らせることも番組としては有効であろう。しかし，アイヌ民族が保持する放送メディアとして，マジョリティ社会へ共生を促すことを考慮すれば，二風谷情報にとどまらず，放送内容に吟味を加えていく必要性が出てくるのではないだろう。こうした課題に対応していくことで，アイヌ民族メディアとしての役割も果たしていくことになるだろう。

これまで，アイヌ語聴取を目的として開局されたFM二風谷放送の放送状況の説明と放送プログラムの内容を示し，これらが放送教育としてアイヌ語プログラムがもつ機能を考察してみた。この放送がアイヌ語の言語的な項目学習の機能を持つものではなく，アイヌ語への親近感を増すことで，学習への動機付けを強める能動的な学習の場の提示という機能があることを明示した。そして内容の計量分析により，情報の共有化によりアイヌ・エスニシティの確認と共通意識を促し，アイヌ・コミュニティーの活性化を促す機能が働いていることを示した。このように考えるとFM二風谷放送は，アイヌ語を中核に地域の人々の結びつきを高め，アイヌ・コミュニティーの活性化を図りながら，アイヌ語が話しやすい言語環境を整え，アイヌ・エスニシティーの自信を回復することを目指している活動だということができるだろう。アイヌ語は，自己のアイデンティティの確認を促す媒体であるとともに，アイヌ民族の結束のシンボル的な役割を担っていると思われる。

結

二風谷でのアイヌ民族のメディアを利用したアイヌ語復興と普及の取り組みについて考察してきた。1では，アイヌ語新聞アイヌタイムズの製作・編集作業の中で既存のアイヌ語では表すことができない語彙や表現の試行がおこなわれ，新聞を発行することでアイヌ語への関心を広め，今後のアイヌ語復興の議論へ一石を投じる役割があることを示した。2では，FM二風谷放送がもつ機能を明らかにした。公共的な放送でアイヌ語が語られることがアイヌ語学習への動機づけとなり，アイヌ民族への情報の共有化により，人と人との結びつきを高め，アイヌ・コミュニティーの活性化を図ろうとしていることを示した。

アイヌ民族は日本の中に組み込まれた先住民族である。言語と文化，そして独自の社会を奪われた歴史を持つ。今日それらを復興し，新たに継承していこうとする活動が試行されている。アイヌタイムズやFM二風谷放送はそのひとつの試みとして行われている。アイヌタイムズは伝統的なアイヌ語の世界の中に，新たな表現方法を模索する運動であるといえる。そして，FM二風谷放送は，かつて日常的に用いられていた自然なアイヌ語を，そのままの形で聴取してもらうことで，これまで日本の社会では使うことができず，封印されてきた言葉を解放し，アイヌ・エスニシティの確認を促し，アイヌ民族のコミュニティーの結びつきを高めようとするものであった。こうした活動を通して，アイヌ語が使える社会的な，言語的な環境の整備が目指されているといえる。アイヌタイムズやFM二風

谷放送のようなメディアは，アイヌ語という民族の象徴を通して，一人ひとりにエスニシティの確認を促し，アイヌ・コミュニティーの形成をはかる媒体としては，有効な機能をもつものである。と同時に，かつてメディアが「想像の共同体」を形成していく媒介であったように，民族的な共有概念をインテグレイトしていく媒体ともなりうる。アイヌ語の復興・普及は，それ自体が目的であるわけではなく，その先にある民族の存立に向けたプロセスのひとつである。この視点にたったとき，アイヌ語メディアはアイヌ民族に向けた内なる役割をもつだけでなく，日本社会にアイヌ民族の存在を主張して，多文化化を促していく媒体ともなる。

註(1) マイケル E クラウス「言語の危機」北方言語研究者協議会編『アイヌ語の集い』北海道出版企画センター 1994年　pp. 251-252

(2) 田村すず子「危機言語の記録と資料提供の必要」崎山理・遠藤史編『危機に瀕した言語について：講演集(1)』2000年　pp. 33-71（文科省科研費調査「環太平洋の言語」成果報告書シリーズC-001）

(3) 中川裕「アイヌ語は死語か？－日本における少数言語復興運動の現状－」新プロ「日本語」研究班1＋言語政策研究会編『世界の言語問題 3』1997年　pp. 43-59（文部省科研費調査08NP0701）

(4) 奥田統己「アイヌ語復興運動の現状とアイヌ語研究者の責任」崎山理・遠藤史編『危機に瀕した言語について：講演集 (3)』2001年　pp. 25-34（前掲「環太平洋の言語」成果報告書シリーズC-003）

(5) 細川弘明「第四世界における言語の政治学」庄司博史編『ことばの二十世紀』ドメス出版　1999年 p. 159

(6) 口承文芸を題材としないアイヌ語による書物は，昭和30年代から40年代初頭にかけて，釧路・阿寒で山本多助，舌辛音作らが物語や随筆，書簡などを綴った冊子『アイヌ・モシリ』(18巻)『ウタサ・カンピ』(1巻)がある。また，アイヌ語雑誌では千葉大学の中川裕が中心となって『パルンペ』という同人誌が発行されたことがある（1993年2月～1996年3月　8巻)。

(7) 浜田隆史「アイヌタイムズ制作の状況と問題点」『アイヌタイムズ』
http://www.geocities.jp/otarunay/taimuzu.html#problem　2003年9月29日取得

(8) 同前　浜田

(9) 同前　浜田

(10) 浜田隆史「エアドゥ，コンサドーレ札幌」『アイヌタイムズ』第21号　2002年3月20日付　pp. 1-2 および，同日本語版　第21号　2002年6月20日付　p. 1

(11) 横山裕之「ユニコード」『アイヌタイムズ』第20号　2001年12月20日付　p. 8 および，同日本語版　第20号　2002年3月20日付　p. 3

(12) アイヌ語の表現の場を広げ，アイヌ語での交流をめざしたアイヌ語同人誌『パルンペ』でも編集会議は重要な位置づけにあった。サークル活動の一貫である編集会議ではアイヌ語がチェックされ，その過程を紙面で示すことで学習者が間違いやすい点やアイヌ語的な表現を教授する役割も果していた。こうしたプロセスの公開は，情報の共有化とともに学習の伸展も促すものとなっていた。

(13) ここでいうミニFMとは，電波法令に基づき，送信アンテナから3 m離れた所で測る電界強度が，500 μv/m以下の無線設備のことを指す。放送免許が必要となるコミュニティーFMとは区別される。

(14) 萱野志朗「FMピパウシ開局2周年のご挨拶」(2003年4月13日付)
http://www.aa.alpha-net.ne.jp/skayano/menu.htlm　2003年7月30日取得

(15) 上野昌之「「消滅の危機に瀕した言語」としてのアイヌ語とアイヌ語教室」『早稲田大学教育学会紀要』3号　2001年　pp. 67-73

(16) 中山迅「これからの放送教育」『放送教育』566号　1995年　p. 25

(17) 赤堀正宣「生涯教育を展望して」『放送教育』519号　1991年　p. 16

(18) 林武文「教育コンテンツ」『放送教育』627号　2000年　p. 44

(19) 時間計測はインターネット版を用いた。インターネット版では，挿入曲が省かれている。

(20) 萱野志朗　2003年7月13日インタビュー　談。